

海辺の記憶を

旅 たどる

つながる湾プロジェクト
ドキュメントブック

TSUNAGARU WAN PROJECT DOCUMENT BOOK



この湾に、タネは蒔かれた

震災直後、牡蠣漁師である友人の船から見た景色でそのスイッチが入った。

塩釜に生まれ、多賀城に住む僕は、それで両方の地域をつなげて考えることができなかつた。しかし湾に浮かぶ船上から見ると、塩釜も多賀城も、また七ヶ浜、浜田、松島、東松島も、同じ湾の兄弟としてつながっているように見えた。それは、明らかに陸上では感じることのできなかつた初めての感覚。

調べてみると、この湾全域が縄文時代からの製塩文化圏であるという。それならなおさら、「湾」で連携すべきだと思った。合併しようなどいうのではない。それぞれの歴史・文化・生き方を尊重しつつ同じ方向を見ることが、これまでと違う新しい力を生むのではないか。

そう考えて行動し始めた時、風変わりな船がこの湾にやつてきた。

タネフネに初めて乗ったとき。外海から湾への入り口でエンジンを止め、しばらく甲板に寝そべつた。太平洋の波に揺られ浮遊するタネフネが「何にも所属せず、ただそこにある湾」と同化したような気がした。「もしもたらタネフネは、この地域に大切なものを教えてくれるフネなのではないか」と感じた。

タネフネをきっかけに、湾全域の仲間たちの輪が広がり、彼らとの交流を通して、自分の地域のことを学んだ。知るほどに、「湾」は僕らにとってかけがえのないものだと確信していった。

気がついたら、タネは小さな花を咲かせていた。その小さな花を多くの方に見ていただきたいと、フォーラムも開催した。次は自らでその花のタネを蒔いてみようと思う。次の世代が、またタネを蒔きたいと思う花が咲くことを願つて。

チーム wan 津川登昭



七ヶ浜 多賀城 塩釜 浜田 松島 東松島

つながる湾 わん プロジェクト はじまる。

「つながる湾プロジェクト」は、私たちを育んできた海の文化を再発見し、味わい、共有し、表現することで、地域や人・時間のつなぎを「陸の文化」とは違った視点でとらえなおそうと、宮城県塩釜市で始まったプロジェクトです。

2013年5月、「TANeFUNE」という小さな船が、日本海からやってきました。彼らは「海からの視点」を求め、伝える航海をしています。私たちは彼らと交流し、「浦戸諸島でつながる湾」という企画を立ち上げました。

TANeFUNE チームは『『種は船』でつなぐ湾』という企画を立ち上げ、お互いのプロジェクトを行き来しながら海辺の記憶をたどって来ました。

私たちが見つけた海辺の記憶を、この本と一緒にたどってみてください。

プロジェクト概要図



CONTENTS.	
4.2	【巻頭文】この湾に、タネは蒔かれた はじめの話】 TANeFUNE が塩釜へ! 活動地域とプロジェクト
4.1	【プロジェクト1】 チームwan 勉強会
4.0	【プロジェクト2】 TANeFUNE カフェ
3.9	【プロジェクト3】 そらあみー浦戸諸島ー
3.8	【プロジェクト4】 語り継ぎのためのリーディング あとがき
3.0	【つながる湾フォーラム】 (海・種・記憶)
2.9	【対談】「種」がもたらしたもの 日々野克彦×津川登昭
2.8	勉強会レポート1 白菜のふるさと浦戸諸島 TANeFUNE が集めた宝物
2.7	勉強会レポート2 海からみた日本列島 TANeFUNE in 南三陸
2.6	勉強会レポート3 松島湾沿岸の貝塚群と塩づくり

TANeFUNE が塩釜へ！



2013年5月26日。浦戸諸島桂島で開催された「塩竈（しおがま）浦戸のりフェスティバル」に、風変わりな小型船が登場しました。その名も「TANeFUNE（たねふね）」。遠く京都の舞鶴市から、「海からの視点」を探求し伝える役割を背負ってやってきたこの船は、この日から約4ヵ月の間、塩釜や浦戸諸島に滞在し、地元の人々との対話や交流を重ねました。

舞鶴から新潟までの記憶をいっぱいに乗せたTANeFUNEは、2013年、松島湾を訪ることになりました。そこで、景勝地松島だけではない湾全域の豊かさをあらためて見直そうとする塩釜の人たちと出会い、「種は船でつなぐ湾」という新たな活動が始まりました。藩政時代には伊達藩の重要な港として活躍し、東北の太平洋沿岸部をつなぐ海運の拠点でもあった塩釜港と、日本海側の北前船（※）に代表されるような海の道が、どこかでつながっていたかのように思えます。

5月26日に桂島で行われた「塩竈浦戸のりフェスティバル」での披露目と浦戸諸島めぐりにはじまり、TANeFUNEは塩釜と浦戸諸島に数ヶ月間滞在しました。一つの港を数日で立ち去らなければならなかった日本海での航海のスタイルとは異なり、ここではある一定期間、TANeFUNEが日常的に在る風景をつくることで、塩釜本土と浦戸諸島をつなぎ、浦戸諸島の島々をつなぎながら、人と人、地域と地域が出会うきっかけをつくりました。



TANeFUNE が巡った地域

2012年、(TANeFUNE)は京都・舞鶴から新潟までの約970kmを、35の港に立ち寄りながら81日間をかけて航海。その後、六本木での展示を経て、宮城県を訪れる。TANeFUNEは各港で出会った人たちが描いた絵や、つくったモノ、いただいたモノなどを「宝物」として船に積み込む。同時に、日本列島を「海からの視点」で見直し、水辺にある暮らしの多様性や豊かさを発信していく。



What's "TANeFUNE" ??

【船質】F RP（繊維強化プラスチック）
【大きさ】長さ 5.36m、幅 2.70m、高さ約 3m
【重量】0.9 t **【機関】**船外機（60馬力）**【定員】**5名
【速度】平均 7 ノット（時速約 13km）
【形状】朝顔の種を模している

アーティスト・日比野克彦の監修・デザインのもと、2010年から3年をかけて、若狭湾の港町・舞鶴で造船された。日比野氏が2003年から行っていた「明後日朝顔プロジェクト」（※）で育てられた全国を旅する「朝顔の種」が、まさに「人やモノ、地域をつなぐ“船”的”」という着想から、「種は船」プロジェクトが誕生。舞鶴からプロジェクトの起点である新潟まで航海をすることを目標に造船を行い、延べ5,000人以上の市民が関わった。

※明後日朝顔プロジェクト…「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2003」において、日比野克彦が新潟県十日町市芦平の集落約20戸の住民たちと朝顔を育てて交流したことからスタート。芦平での栽培と種の収穫が続けられるほか、ここで採れた種が水戸、福岡、岐阜と各地に運ばれて栽培の輪が広がり、2013年は25地域が参加。人の記憶を載せた種が地域と地域を繋げ、大きなネットワークとなっている。

森真理子（一般社団法人 torindo 代表）

南山大学卒業後、学芸員等を経て、フリーランスで美術・演劇・ダンス・音楽などの企画制作・プロデュースを行う。2009年より京都府舞鶴市でのアートプロジェクト「まいづるRB」ディレクター。2012年より一般社団法人 torindo を立ち上げ、日比野克彦監修の「種は船」プロジェクトのほか、遠藤一郎による小中学校支援学級での共同作品展や、ダンサー・砂連尾理と老人ホームのお年寄りによるシリーズ「とつとつ」などを実行している。

いま私たちが生きている時代を考えてみると、この100年余間に圧倒的な勢いで流れ込んで来た近代化が過渡期を迎えるよう思います。さまざまな分野で同時多発的に起った産業化・資本主義化の流れは、私たちの生活のベースを急速に早め、合理的にしました。その過程では、捨てざるを得なかつた風習や考え方、風景が数多くあったことでしょう。そうして失われてきた風景や記憶をいま一度見つめ直す視線が、TANeFUNEで伝えた「海からの視点」ではないでしょうか。また、利便性や経済性だけを優先した論理ではなく、水辺にある生活の豊かさや厳しさを受入れ、そこにある自然条件と折り合いをつけていく論理、それこそがTANeFUNEで伝えてきたメッセージだったのではないですか。様々な知恵と文明を駆使した現代社会を生きている私たちにとって、その視点を持ち続けることは、必ずしも水や海、船のあるところだけではなく、陸や丘の上でも、都会の街中でも有効なものだと言えます。このことを、塩釜でまた新たな仲間たちと共有できたことを幸運に思います。

※北前船：江戸時代から明治時代にかけて活躍した商船で、北陸以北の日本海沿岸諸港から下関を経由して瀬戸内海を通り大阪に至る航路を行き交った。



つながる湾 プロジェクト

松島湾 Matsushima wan

宮城県の中ほどに位置する塩釜、多賀城、七ヶ浜、浜田、松島、東松島の各地域に面する湾。湾内には浦戸諸島があり、かつては太平洋への玄関口として栄えていた。

海域は水深が浅く、プランクトンが豊富で波が穏やかであるため、海苔や牡蠣の養殖が行われ、種牡蠣は全国に出荷されている。

つながる湾フォーラム

つながる湾プロジェクトのスタッフや、プロジェクトの中で出会った人たちが一同に介し、活動報告やパネルディスカッションを通して、プロジェクトの成果を共有。

浦戸諸島でつながる湾

チームwanメンバーが中心で実施。

PROJECT 1 チームwan勉強会

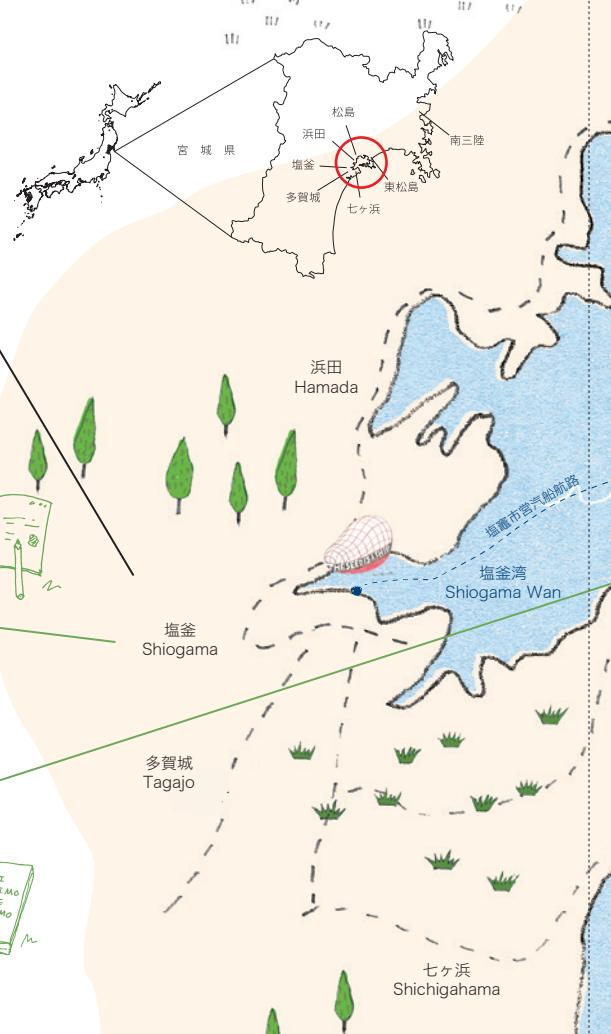
湾の文化、海の文化、浦戸諸島の文化を学ぶ小規模の勉強会・交流会を継続的に開催。

語り継ぎのための リーディング PROJECT 4.

浦戸諸島に伝わる物語を多くの人々へ「語り継ぐ」ため、朗読台本を作って上演したり、語り合う場を持ち、伝承活動の広がりを創出。

浦戸諸島 Urato syoto

浦戸諸島（うらとしょとう）とは、松島湾の入り口にある島嶼群の名称。四島の有人島のほか、無人島で名前が分かっている島が53、その他無名の島も多数ある。名前は「松島湾（浦）の門戸」の意で、「外松島」とも呼ばれる。塩釜港から市営汽船で渡ることができ、最も近い桂島へは23分、最も遠い朴島へは54分程度到着する。



『種は船』でつなぐ湾

TANeFUNeメンバーが中心で実施。

PROJECT 2.

TANeFUNe カフェ ステ

TANeFUNe が浦戸諸島4島5地区を巡回し、島民の方の「おちゃっこ」の場として移動カフェを開設。

松島 Matsushima

松島湾 Matsushima Wan

野々島 (ののしま)

面積 0.56km² / 人口 75人
小規模特認校の浦戸第二小学校、浦戸中学校がある。島のいたるところに洞穴群（ボラ）や野仏があり、ラベンダー畑、「椿のトンネル」などが名所。

浦戸諸島 Urato syoto

桂島 (かつらしま)

面積 0.76km² / 人口 222人
(うち石浜地区 47人)
桂島、石浜 2つの地域があり、浦戸諸島では最も人口が多い島。海水浴場からは広々とした太平洋が望める。

石浜地区 (いしはま)

人口 47人

塩釜築港や発展に力を尽くした「白石廻漕店（白石商会）」の石蔵や屋敷の礎石が残っており、当時の繁栄を偲ばせる。

寒風沢島 (さぶさわじま)

面積 1.45km² / 人口 123人

藩政時代には伊達藩の江戸廻米の港として栄え、日本初の西洋式軍艦の建造も行われた。田んぼや湿地が広がり、天水のみで浦戸米が作られている。



PROJECT 3.

そらあみー浦戸諸島ー

アーティスト・五十嵐靖晃が各地の浜辺で地元の人と漁網を編むプロジェクトを浦戸諸島4島で実施。



TANeFUNe in 南三陸

9月11日、宮城県北東部に位置する南三陸町で出張 TANeFUNe カフェを実施。地元の漁師さんらと交流した。

出張編



※地図情報は 2013年12月現在

チーム wan 勉強会



もつと地元のことを探りたい！

その想いから、チーム wan 勉強会に参加しました。この湾には、何も知らないともその場に行くだけで感じられる美しさ、心地よさがあります。しかしながら、史跡や街並みなど、湾の歴史や文化を知ることによつてより輝きを増す魅力もあります。また、この地域を訪れたことのない方々に魅力を説明するには知識が必要です。

知らなかつた“湾”を学ぶ

TANeFUNeが塩釜や浦戸諸島での活動を始めた頃、地元塩釜メンバーは、湾の文化、海の文化、浦戸諸島の文化を学ぶ勉強会を開始しました。他所からやってきたTANeFUNeが来訪者の視点で湾のことを発見していくなら、地元側も自分たちの地域をもう一度発見して、見つけたものをそれぞれに持ちよりぶつけてみよう。

コーディネートは、地域の財産を認識し育てるコミュニティを発足させるべく活動している「一般社団法人チガノウラカゼコミュニティ」。地元の歴史を研究している方や、海苔の生産者、文化の視点から白菜の種採りに取り組む方など多彩なゲストを招き、8回にわたって開催されました。



勉強会のテーマ

- 第一回 「三陸汽船ファンの集い」 講師：大和田庄治
- 第二回 「藻塙燒神事の秘密」 講師：津川登昭
- 第三回 「初めて世界一周した日本人・津太夫と左平」 講師：綿智
- 第四回 「白菜のふるさと浦戸諸島」 講師：高橋信壯 レポート vol.1
- 第五回 「俺の財産・海苔を知る会」 講師：星博
- 第六回 「海から見た日本列島」 講師：山田創平 レポート vol.2
- 第七回 「ハゼのじゅずっこ釣り＆松島湾のアマモ再生」 講師：伊藤栄明
- 第八回 「松島湾沿岸の貝塚群と塩づくり」 講師：菅原弘樹 レポート vol.3

一方、東日本大震災の影響もあり、我々の繋がりの根底をなすこの地域の魅力は急速に失われつつあります。この問題の重大さはこの地域について学んだ事により、より強く感じられるようになります。私たちには何ができるのか。勉強会を通じて共に学んでいく中で、この故郷を愛する仲間との繋がりが醸成されたと感じます。

チーム wan (わん) とは?
塩釜のメンバーを中心に、松島湾域に暮らす人々、湾に興味のある仙台圏の人々らが集う。オープンなネットワークで、「wan」には「湾」のほか「ワードエリアネットワーク」の意も含む。

wan

白菜のふるさと浦戸諸島

日本人に身近な食材の白菜ですが、浦戸諸島で種が採種されたことが日本での白菜の普及に大きく貢献したことを、私は知りませんでした。この日の勉強会では、白菜づくりの歴史や現在の高橋さんの取り組み、白菜を用いた食交流などについてお話をうかがいました。

vol.1 勉強会レポート 于-L WAN 勉強会 松島白菜 Matsushima Hakusai

松島湾の浦戸諸島を中心に育成・採種された白菜品種群の呼称。1915(大正4)年に伊達家養種園の技師・沼倉吉兵衛が、隔離栽培ができる島の環境を利用して採種に成功。1922(大正11)年には渡辺穎二が「渡辺採種場」を設立して桂島での採種事業を開始し、順次他の島へも拡大された。多くの島民の協力を得て純度の高い白菜種子が量産され、「松島白菜」の種子は全国の農村に広く供給されることになった。地元宮城県でも大きな産地が形成され、「仙台白菜」の产地銘柄で全国に出荷。大正末期から昭和初期まで全国一の出荷量を誇った。

白菜は、明治時代に中国から種が持ち込まれたものの交配がうまくいかず、国内で種を採るまでには多くの苦労がありました。白菜はアブラナ科アブラナ属で菜の花を咲かせる植物ですが、他のアブラナ科の植物と交配しやすく、当時は純粋な白菜の種を探ることが困難だったのです。種採りに成功したのは大正時代。伊達家養種園の技師・沼倉吉兵衛が様々な実験を行い、人工的に隔離した部屋で純度の高い種が採れることをヒントに、離島での栽培を考え出しました。そして選んだのが松島湾の浦戸諸島。無人島だった馬放島で白菜の種のみを植えたところ、純度の高い種が実ったのです。こうして松島湾の島で採種された種には「松島白菜」の名がつけられました。大正11年には渡辺穎二氏によつて渡辺採種場が設立され、島民の方々の協力を得て多くの種が採れるようになり、全国へ出荷されました。この種を使って宮城県内で育てられた白菜は「仙台白菜」と名付けられ、昭和初期まで日本一の出荷量を誇っていたそうです。

現在でも浦戸諸島では、朴島と野々島で白菜の種取りが行われています。2011年の東日本大震災後、高橋さんたちは、仙台市内や島の小中学生、ボランティアとともに白菜の種植えを行い、採種文化の保存活動を行っています。また、

宮沢賢治の作品に登場する「白菜畠」をテーマに、岩手との地域交流や食文化を伝える活動を行っています。

白菜にまつわる様々なお話から見えてきたことは、普段何気なく食している白菜には、その始まりの種一粒にも歴史が詰まつており、作り手の思いが込められているということです。地域特性を生かした食材づくりや、先人の知恵の賜物である白菜の種採りを絶やすことなく、地域資源として守り活かしていくことが、今の私たちにできることなのではないかと考えさせられました。（相原綾乃）

勉強会講師紹介

高橋信壯（リエゾンキッチン・食の学人の会）



私立明成高等学校調理科教諭。2006年から多様な地域連携のもと、「食の学び」の活動「リエゾンキッチン」を進めている。東日本大震災後からは、塩釜市浦戸諸島の野々島で「白菜の採種文化の保存活動」を行っている。また「松島白菜」のもととなった「芝葉白菜」をモチーフに描いた宮沢賢治の作品「白菜畠」との出会いから、宮城と岩手の地域を結んだ食文化交流活動を展開している。



勉強会講師紹介

高橋信壯（リエゾンキッチン・食の学人の会）

私立明成高等学校調理科教諭。2006年から多様な地域連携のもと、「食の学び」の活動「リエゾンキッチン」を進めている。東日本大震災後からは、塩釜市浦戸諸島の野々島で「白菜の採種文化の保存活動」を行っている。また「松島白菜」のもととなった「芝葉白菜」をモチーフに描いた宮沢賢治の作品「白菜畠」との出会いから、宮城と岩手の地域を結んだ食文化交流活動を展開している。

TANe FUNe カフェ

TANeFUNe(タネフネ) カフェとは??

2013年8月1日(木)～31日(土)、TANeFUNeが浦戸諸島4島5地区を巡回し移動カフェを開設。美味しい冷茶を無料にて提供するほか、TANeFUNeが運んでいる「海にまつわるエピソード」「TANeFUNeと出会った人の記憶」をお話しながら、島民の方々からは島の生活のお話、東日本大震災後のお話などをうかがったり、島の様子をスケッチに描いていただけたりする時間を過ごしました。

浦戸諸島に8月の一ヶ月間TANeFUNeでおじやまして、おちやっこ飲み(東北地方ではお茶を飲みながらおしゃべりをする事をいふ呼ぶ)を開き、乗船体験やスケッチをする『TANeFUNe カフェ』というスタイルで、島の人達や島に訪れる人達と交流しました。日・月曜は桂島、火・水曜は朴島、木曜は寒風沢島、金曜は石浜、土曜は野々島と曜日ごとに顔を出し、カフェと言つてもいわゆるコーヒーやスイーツなどを販売するのではなく、お茶を飲みながら網を編みながらお話をし、島の人から聞いた話や頂いたモノなどがカフェのメニューとなっていました。

僕たちTANeFUNeクルーが浦戸諸島に来てまず最初に衝撃を受けたのが、菜の花の種のこと。いわゆる菜種ですが、これを育てると白菜になるのです(※)。白菜の種、菜種、菜の花。言われてみると合点が行くけれど、とても驚き、今までとは違う目線で菜の花というモノを考えるようになりました。浦戸諸島では渡辺採種場という種屋さんの依頼を受けて、白菜の種を採るために菜の花を昔から育てていて、今でこそ少なくなつたものの3、40年前はどの島も綺麗にびっしりと菜の花が咲いていたそう。

いたいた菜の花の種などとともに、こうしたエピソードが「メニュ」となり、「ヶ月間どんどん増えていきます。さらにつれは「宝物」としてTANeFUNeに積み込まれ、次の土地

おちやっこ飲みの合間に乗船体験。島を少し回りながら海を感じながらいろいろな話を聞くことも、とても面白いものでした。船が安全に航行できる海の道から魚が釣れるスポット、陸からは見えない田んぼの跡地や海上の謎のシンボルマークなどなど、目にしなければ考える事もできない、興味すらわかない出来事に出会うことができたし、陸からのアプローチ、海からのアプローチ、両方向から一つのスポットを見る行為は単純に冒険心が芽生え、少し違う次元にいけるのです。

4島5地区はひとつひとつは近いけれど、端から端までは遠く感じるサイズにも差があり、島が違えばそれぞれの歴史や風土があることもだんだんと解ってきて、浜などで拾った貝や石、小さな漁具の一部から違いや共通点を知る事もできました。そして日常的に起こっている事や小さな変化などを島の人達とお話ししたり、島外の人達にも話しあげたりしました。

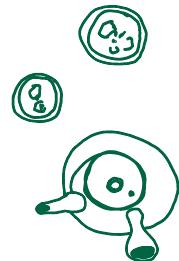


島の昔の話を聞いていると、やはり東日本大震災の前後の話になることが多く、島の人達にどうして海が生活の場であり、仕事場だったという事



喜多直人(TANeFUNe 船長)

石川県金沢市で生まれ育つ。『自然と人間の同居』をテーマに、誰かにとっては日常、誰かにとっては非日常を記録する。TANeFUNe 船長として2013年6月より宮城県塩釜市に滞在、浦戸諸島でTANeFUNe カフェや宝ものづくりのワークショップを行った。



※「菜の花」とは、アブラナの花及びカブ、白菜などの近縁の菜類を咲く花の総称である。アブラナ科の植物は交雑しやすいため、純粋種を採る目的により島で栽培されている。

を深く実感できましたし、太平洋を背にして塩釜湾に蓋をするように位置する浦戸諸島が、塩釜や松島を津波から守ってきた歴史も、船長としてTANeFUNeに積み込むことができたよう思います。

提供していた冷茶は私、喜多のこだわり。塩釜の日本茶専門店「矢部園」さんから学んだ淹れ方で、急須に香りの強い茶葉をいれ、そこに急須いっぱいの氷をいれ水を注ぎます。お母ちゃん達は、「それで出るの?」と不思議顔。おもむろに急須をシェイクして氷のカラシャココロシャカと心地いい涼しげな音が鳴り、ガラスのショットグラスに





TANeFUNe

が集めた宝物

TANeFUNe が出会った人々からも
らったモノや描いてもらった絵は、
「土地の記憶」として TANeFUNe
に積み込まれ、次の土地へと運ばれ
ていきます。ここでは、今回の航海
で積み込まれた宝物の中から厳選し
た 8 点をご紹介します。

Takara mono Selection



Takara

1. Data:2013/5/26
場所:野々島
くれた人:月本麻美子



Takara

2. Data:2013/7/20
場所:寒風沢島
描いた人:樹未来矢



Takara

3. Data:2013/7/28
場所:寒風沢島
描いた人:中澤ちよ

野々島の浦戸第二小学校に塩釜市内から
船で通っている小学1年生。ミュージカル
に出たりダンスをしたり、足も速くてとても
活発。この日が初めての TANeFUNe 乗船で、その後何度も TANeFUNe カフェに遊びに来てくれました。



Takara

4. Data:2013/8/14
場所:野々島
集めた人:喜多直人



Takara

5. Data:2013/8/23
場所:桂島 石浜地区
描いた人:日比野克彦



Takara

6. Data:2013/9/5
場所:くろしおマリーナ(塩釜市)
くれた船:TANeFUNe

TANeFUNe の船底についていた《牡蠣》
などの貝類、海草類。約3ヶ月の浦戸
諸島滞在で付着した松島湾の海の生き物
たちです。昨年の日本海の航海ではフジ
ツボが多くたのですが、さすがは松島
湾、牡蠣が目立っています。約4時間か
けて剥がしたもの一部を持ち帰り、乾
燥させました。

Takara

7. Data:2013/9/11
場所:南三陸町
くれた人:小野具大



Takara

- wakame 養殖の漁師で30代半
ば、若手のホープの具大(ともひろ)さん。津波で鳥居が
壊れた荒嶋神社を修復するブ
ロジェクトのTシャツをぜひ宝箱に、と持て来てくれました。
TANeFUNe カフェに遊びにきて、最終日の解体まで手伝ってくれ、南三陸での最後を1人見送ってくれました。

Takara

8. Data:2013/9/11
場所:南三陸町
描いた人:大森清吾



南三陸町志津川にある「おおもり食堂」のマスター。店を津波
で流されましたが、復活して頑
張っています。数年前に病気を
されてから絵や歌、詩を作り始め、作品が食堂中に貼ってありま
した。この日は震災から丸2年半だったので、船の上でエンジンを停
めて、一緒に黙祷をしました。

(文・喜多直人)

TANeFUNEがその航海によって伝えようとしている「海からの視点」。この日の勉強会では、水域に暮らす人々を研究している山田創平さんから、「海側から日本列島を見る」ことを軸に、日本の海洋文化について学びました。

山田さんの文献研究から、これまでとは違った歴史や価値観が見えてきました。たとえばある漁村では、漁で獲ってきた魚はまず初めに家族や地域の人々に分けてから市場に出していたということです。人々との分かち合い、いわゆる資源の分配がごく日常的に行われていたということ。そこには、近代以降の国家が持つ階層、征服、資本主義といった特質とは相反する価値観があつたことに気づかされました。

また、民俗学者の柳田國男氏が示唆したように、日本の土地を国の領土としてではなく、海流の流れの中に位置する列島と見るとより様々なことが見えてくるという視点も、興味深いものでした。山田さんは、文化は黒潮に乗って南から北へ流れてきており、その流れを受けて日本文化は形成されているという見解を提示されました。

山田さんと文献に記された絵や写真を見ながら、日本と東南アジアに多くの共通点があることを確認しました。各地にみられる船を競わせる行事や、船の形の共通点、日本誕生の神話とされる「イザナギとイザナミ」の話と似た物語がパブアニューギニアの逸話にもあることなど、黒潮による文化の形成を裏付けるような資料が並びました。ほかにも、日本の海洋文化の特徴として①天体への信仰②製塙、製鉄などの海洋民の生業③人は海の底に沈んでいくという死生観などが挙げられ、地域が違えど海に暮らす人々にはある共通した文化があることを学びました。この日の学びから、塩釜の「藻塙焼き神事」に代表される塩づくりや、山田さんが見つけたという塩釜神社の石碑に刻まれている太陽、月、星のモチーフも、この海洋文化と何らかの関係があるようと思えてなりませんでした。

海に暮らす人々の生活を見ていくと、地域を超えた海づたいの文化があることに気づきます。「海の視点」から日本の文化を新たに紐解きながら、視野を広げて地域を見ていくことの面白さを体感することができた勉強会でした。(相原綾乃)



海からみた日本列島

vol.2

勉強会レポート 2013年8月29日

チ - ム wan 勉強会

柳田國男『海上の道』Kaijyo no Michi

民俗学者・柳田國男による昭和36年の著作。柳田が24歳であった明治31年、渥美半島の伊良湖岬に椰子の実が流れ着いているのを見たことに端を発し、その後の自身の研究により収集した宝貝の分布や鼠が海を渡る伝承を手がかりに、日本民族の祖先は南方から稲作技術を携えて「海上の道」を北上し、沖縄の島づたいに渡来したという仮説を披露している。



勉強会講師紹介

山田創平（社会学者）



社会学者。専門は地域研究（芸術と地域、マイノリティと地域、都市空間論）。京都精華大学人文学部専任講師。NPO法人アートNPOリンク理事、大阪市現代芸術創造事業実行委員、HAPS実行委員などを兼任。また現代美術家のブルード・ラ・マドレースらと共にインスタレーションやパフォーマンスの制作、発表もしている。世界各地の水辺をめぐり、水を切り口に新しい社会のあり方を模索している。

そらあみ — 浦戸諸島 —

「そらあみ」は、アーティスト・五十嵐 靖晃が各地の海辺などで地元の人と漁網を編み、空に掲げるプロジェクト。2013年8月10日(土)～31日(土)、TANeFUNEカフェの一環としてワークショップを開催、浦戸諸島の人たちと2枚の漁網を編み上げ、完成した網を桂島と朴島で展示しました。完成了「そらあみ」は、TANeFUNEにかける「種衣」として次の航海へ旅立ちます。

「そらあみ」はカラフルな糸を使って漁網を編むワークショップを行い、空に掲げるという共同制作作品です。これまで、京都府舞鶴市の赤煉瓦倉庫広場、岩手県釜石市の仮設住宅、三宅島の漁港、浅草の浅草神社、瀬戸内の塩飽諸島、六本木ヒルズ、愛知大学の豊橋キャンパスと全国各地で展開してきました。8カ所目となつた今回は、海苔



「そらあみ」では、「網を編む」という古来から水辺で営まれてきた行為を通じて参加者同士の交流を図りながら、みんなで編んだ漁網が空に向かって立ち上がる風景を一時的に出現させることにより、普段見慣れた風景をもう一度見直してもらう契機を生むことを目的としています。今回最も重要視したのは、塩釜や松島といった松島海岸に暮らす人が、浦戸諸島に足を運び、共に編むことで、島の人と出会い、そこに流れれる時間に触れ、出来上がった網越しに自らの土地を見つめ直すきっかけにでもらいたいという部分でした。それは一言で言うと「海からの視点」を持つということです。

浦戸諸島は太平洋を背にして、塩釜湾から松島湾にかけての大きな一つの湾に蓋をするような位置にあります。故に東日本大震災の津波の際、自然の防波堤の役割を果たし、津波被害を和らげたと言われています。その分、島まるごと津波に飲み込まれた浦戸諸島の被害は甚大でしたが、命を失った方はほとんどいなかつたそうです。こういった出来事は遥か昔から浦戸諸島に生きる者にとっての宿命で、海を見つめ、その恵みと災害と共に生きていくための叡智を代々受け継いできた賜物であり、そ

のことを誇らしげに語る島の方の姿もありました。

今回の「そらあみ」は、「網を編む」という行為によって開かれた場での単なる体験や交流のみならず、船での通勤通学、海苔や牡蠣の養殖といった群島ならではの暮らしの中から見えてくる海との関係や、「島に生きる感覺」といったものに、それぞれが自らの身体を通して出会う機会となりました。そこには、東日本大震災後の今だからこそ、島から学び未来へ繋ぐべき、この湾を守り生きる人々の誇りであり、この海ならではの「海からの視点」だったのだと思います。

の距離を測っているようでした。

5週間に及ぶ滞在活動の中で一人一人と丁寧に向き合つてみて、こういった状況に対してもないどこか、「空白の場所」のような場を、ささやかもつくり出すことが、今のこの土地ですべき外来者の仕事として最も重要なだと振り返ります。

また、今回の滞在活動全体から感じたことは、この土地の方々は2011年3月11日のあの日から2年半、走り続け、頑張り続けてきたことと、少し一休みしたいくらいにいろいろなことがあり過ぎたということでした。死と向き合い、外部からの様々な援助や意見を受け入れ、出会いと別れを繰り返し続けてきたことによる、ある種の慣れからくる心労の蓄積のようなものを感じました。我々との出会いに対しても、「またいざいなくなる人と向き合うこと」と



五十嵐 靖晃（アーティスト）

東京藝術大学大学院修了。土地に住み、そこで出会う人と共に、普段の生活に新たな視点と人の繋がりをつくる試みを行う。代表作は、福岡県太宰府天満宮との協働プロジェクト「くすかき」、住民たちとともに新たな風景をつくり上げる「いろほし」「そらあみ」など。舞鶴での「種は船」プロジェクトではワークショップリーダーを務め、舞鶴から新潟までの航海ではTANeFUNE船長を務めた。

の養殖等で普段から網に親しみ深い島のみさんや、定期船で塩釜など内地からやってくる参加者の方々と共に、船着き場や桟橋を舞台に高さ4.5m×幅18mの網を編み上げ、桂島の休憩所前の仮設電柱間の空中（9月1日～8日）と、朴島の牡蠣棚の海の上の空（9月10日～15日）に、それぞれ一週間程度、計2週間ほど展示しました。東日本大震災後、島に色が無くなつたという島民の声もあり、今回使用した5色の糸は、仙台白菜の種の产地として知られる浦戸諸島に縁の深い菜の花の色をモチーフにしました。

TANe FUNe in 南三陸

8月の塩釜・浦戸諸島での滞在を終え、TANeFUNeは9月10日から12日までの間、宮城県南本吉郡南三陸町に滞在しました。「つながる湾プロジェクト」が立ち上がった時から、松島湾のほかに東北の太平洋沿岸部の湾を航海できないかと可能性を探っていましたが、時期的な問題や震災後の漁の再開に加え、防潮堤や嵩上げ工事がいちごで始まっているという被災地ならではの要因も重なり、候補地探しは難航。そんな中、仙台や南三陸町の協力者を得て、三日間の南三陸町志津川での活動が実現しました。

ひとつの湾だけでなく複数の湾を訪れることで、それぞれの土地を相対化し、TANeFUNeの活動の意味をあらた

りに生々しくつまとうその記憶は、南三陸の風景とともにそこにありました。

大勢の人たちの手と記憶でできた船、そのデザインの特徴から平均速度が時速1-2km（自転車でゆっくり行くぐらい）というのんびりした船、水面までの距離が近く水際がすぐそばにある船……そんな特徴を持つTANeFUNeを「呑気な船だなあ」と形容した人がいました。漁船でも客船でもなく、人と地域をつなぎ記憶を載せる「種」としてだけあるTANeFUNeの場合、その感覚がひと際です。その船が、塩釜から南三陸へと往来し、再び塩釜に戻ったことは、種が成熟し花を咲かせて実を落とし、そしてまた芽吹くように、今後ますます大きな意味を持つだろうと強く感じた旅でした。（森真理子）



めて見つめ直すことができるのではない
かと期待して南三陸町を訪れました。今回
のTANeFUNe船長・喜多さんの提案で、単にTANeFUNeとそのメンバーワークだけで南三陸を訪れるのではなく、塩釜でTANeFUNeに関わってくれた塩釜在住のメンバーにも積極的に声をかけ、一緒に南三陸へ行くことに重きが置かれました。そこから生まれる交流こそが、湾をつなぐという点で重要な意味を持つだろうと、南三陸行きを前に再確認できました。

南三陸町では、三日間という限られた時間と事前の短い告知期間にも関わらず、志津川港でお仕事をされている漁師さんや水産関係のお仕事の方を中心によく

の方々にTANeFUNeカフェでのおしゃべりや宝物づくりを楽しんでいただけきました。昨年の航海でもそうであったように、「なんだか面白い船がある」という興味本位で声をかけてくださる方も、はじめは距離を持つて眺めている方とも、船の由来やこれまでの航海の話をするとぐっと距離が縮まり、その土地の海や港の話になる。そうした会話が自然にあちらこちらで起きた現場でした。船といふ共通項で、船旅をする旅人と海のそばで生きてきた人々との間にコミュニケーションが生まれる臨場感は、やはりTANeFUNeならではのものだと再認識しました。そして、南三陸で聞く海の話は、甚大な被害を受けた土地と人の計り知れない記憶そのものでした。あま

2013年9月10日～12日、TANeFUNeは南三陸町を訪れました。東日本大震災からちょうど2年半。10mを超す高さの津波が襲い、市街地の多くが流出した爪痕もまだ生々しい南三陸町でしたが、この町の海辺で力強く生きる多くの人々のお話を聞くことができ、港で行った出張カフェにも地元の漁師さんらが訪れてくださいました。



松島湾沿岸の貝塚群と塩づくり



Vol.3

勉強会レポート 2013年12月3日

チ - ム Wan 勉強会

製塩土器 Seien Doki

日本では土器で海水を煮詰めた「土器製塩」が最初の製塩法といわれており、東北の太平洋沿岸に縄文時代の製塩遺跡が点在するが、とりわけ松島湾沿岸には遺跡が集中している。製塩土器は①大きさ20cm～30cmの深鉢で、小さな平底か、尖っている②外面に模様が無く、全体的に薄くつくれられている③火を受け赤く変色している④表面や器壁にも塩の結晶ができるため割れやすく、破片で出土するという特徴があり、一度の塩づくりにしか使わなかったと考えられる。

松島湾には湾内に流れ込む大きな河川が無く、縄文時代以前から地形がほぼ変わらずに残っています。そのため沿岸には貝塚が多く確認され、中でも東松島市宮戸島にある里浜貝塚は縄文人の生活を紐解く上で貴重な史跡とされています。この日は菅原弘樹さんのお話で、縄文時代の松島湾に思いを馳せました。

貝塚とは単なるゴミ捨て場ではありませんでした。貝の殻や魚の骨の他にも、割れた土器や工作くず、儀式祭具や死者の埋葬まで、縄文人の生活の全てを自然に帰す場所だったのです。そのため、貝塚の調査から当時の生活を驚く程に細かに把握することができるのです。

た現代でも変わることなく続いているのではないでしょうか。（大沼剛宏）

く明らかにする事ができます。

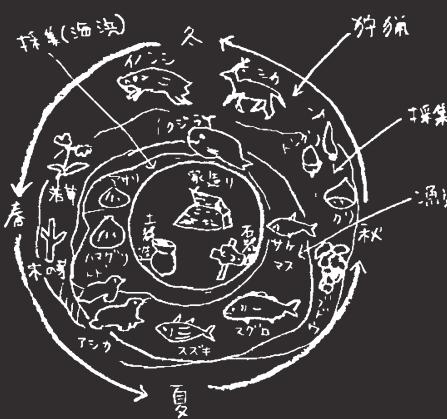
例えば、縄文時代の食生活は意外にも豊かでした。季節ごとに違う木の実やキノコを探集し、旬の魚介を食べていました。現在と同じように春にはアサリを夏にはウニを秋には牡蠣を食べ、スズキやアイナメを釣っていたのです。また、縄文人は「生業カレンダー」を持つていたことが分かっています。貝塚が示す食の季節サイクルと同じ層から出土するものを見てみると、その季節に何をしていったかを確認できるのです。松島湾沿岸一帯で製塩土器が出土するため、この地域で縄文時代に製塩が行われていた事が分かっていますが、製塩は夏頃に行われていたと推察されます。

松島湾沿岸の貝塚群の調査はまだほんの一部しか進んでおらず、縄文人の残した営みの歴史が今尚眠っています。それでも解ってきた事は、この地に生きた人々は穏やかで豊かな湾の恵みを頂いてきたということです。それは数千年を経

た現代でも変わることなく続いているのではないでしょうか。（大沼剛宏）



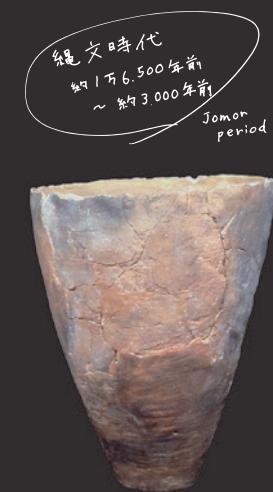
大量的薪燃料を必要とする製塩は、薪を求めて浜から浜へ周期的に移動しながら行われました。生成量を見ると、当時の集落規模に必要な分を大幅に越えた量が製塩されており、塩と塩蔵品を用いて交易を行っていた事が考えられます。内陸では塩の産出がないのでたいへんな貴重品であり、もしかしたら、松島湾産の塩は一種のブランド品となっていたのかもしれません。山形で産出する石材で



勉強会講師紹介

菅原 弘樹

多賀城市出身。奥松島縄文村歴史資料館館長兼学芸員。専門は考古学。松島湾を中心とした縄文人の生業や食生活の解明が主な研究テーマ。震災後は、地中に残された震災履歴の確認と縄文時代以来受け継がれてきた宮戸島の自然や景観、歴史、文化を活かした復興まちづくりの実現に向けて取り組んでいる。



縄文時代
約1万6,500年前
～約3,000年前
Jomor period

語り継ぎのための リーディング

「語り継ぎのためのリーディング」は、地域の物語や先人の知恵を、今生きる私たちが自分事にして語り継いでいくきっかけを創出する取り組みです。

同じ土地に生きた先人の物語に想像を膨らませ、自分たちの価値観を添えて次世代へ語り継ぎます。方法は物語の朗読に限らず、歌や詩を用いたり、時には調理方法や衣類の制作といった疑似体験を通して、より多面的な理解を通して一人一人の表現方法を引き出すことを試みています。

一人一人が自分の方法で
地域の物語を伝える。

浦戸諸島野々島にある塩釜市立浦戸第二小・中学校では、浦戸の民話や風土、言い伝えなどを題材にした演劇活動を通して、生徒や島民の誇りを育み続けています。「語り継ぎのためのリーディング」で最初の題材とした「海よりも風よりも」は

私はこのような取り組みに触れ、共感すると同時に、浦戸諸島の物語は島だけの物語ではなく、私たちを育んできた海域の文化圏の物語であると気づかされました。そこで、「語り継ぎのためのリーディング」をスタートしました。今を生きる私たちが、地域の物語を自分事として捉え直し、時代時代の口承者として、次の世代へ自分たちの生きた証を添えて引き継いでいこうという取り組みです。

私たちと先人を結びつける装置として、また土地から学び続けるための一つの方法として、機能させることができます。

2013年12月に寒風沢島で行つたリーディング会では、浦戸第二小学校6年生の本郷笙吾くんによる語り継ぎ、民謡歌手・木島裕さんによる「淡海節」に想いを乗せた歌い継ぎを行いました。本郷くんは、波瀾万丈な人生を生き抜く船員たちの生きる強さを語り、木島さんは、大海原に浮かぶ漂流船で家族を想う船員の哀切な心情を、三味線の音色と共に表現しました。2014年1月からは月一回のペースで、音楽家や料理家、俳人など様々なジャンルの専門家を講師に招き、参加者と共に語り継ぎのための台本づくりを行っています。参加者自身が記した言葉や歌は、名前とプロフィール、制作年を添え、地域住民の視点や価値観を収めた記録としても新たに残していくと思います。この企画を、今と昔を、

高田彩（ビルド・フルガス代表）

1980年、宮城県塩釜市出身。エミリー・カー美術大学（カナダ・バンクーバー）卒業。
アーティストネットワーキング「ビルド・フルガス」代表（www.birdofugas.com）、2006年宮城県塩釜市にbirdo spaceを開廊。
地域の人々を巻き込んだアートプロジェクトや、クリエイティブな視点と表現方法で新たに塩釜の魅力を伝えるウェブサイト「クラシオ」（www.kurashio.jp）等の企画運営を行う。

2009年に上演された作品で、江戸時代に千石船「若宮丸」で漂流し、江

国らしき世界一周を果たした寒風沢島出身の乗組員・津太夫（つだゆう）と左平の物語です。この逸話は、鎖国をしていた当時の時代背景や、文献資料として充分ではないことから

これまであまり語られませんでしたが、演劇となることで私たちの想像力や興味関心をかき立ててくれました。



浦戸諸島でつながる灣

海よりも風よりも

2013年12月8日、「語り継ぎのためのリーディング」最初の公開企画として、「海よりも風よりも」のリーディング発表が浦戸諸島寒風沢島で行われました。ここではこの物語のあらすじと、ストーリーテラーとなったお2人のオリジナル台本をご紹介します。

あらすじ

1793年初冬、石巻の千石船・若宮丸は、仙台藩から江戸幕府へ納める米俵と木材を積み、石巻を出港した。この船には、浦戸諸島出身の船乗りが6人、乗組員として乗船していた。

ところが出港して1週間後、若宮丸は激しい嵐に遭い、舵を失って漂流する。半年後、アリューシャン列島に流れ着いた一行はロシア人に保護され、シベリアの中心部にあるイルクーツクで家と生活資金を与えられ、9年間を過ごす。一見平和な異国での暮らしだったが、9年のうちに3人がこの世を去り、4人の若者が帰国をあきらめてロシア正教の洗礼を受けた。

1803年、日本との交易に漂流民たちを利用しようと考えた新ロシア皇帝・アレクサンドル1世は、若宮丸乗組員を呼び出して帰国の意思を尋ねる。東松島市室浜出身の儀兵衛と多十郎、浦戸諸島寒風沢島出身の津太夫と左平の4人が帰国を希望し、一ヶ月後、ロシア初の世界周航船「ナジエージダ号」で出航。翌年9月、長崎港に入港し、図らずも初めて世界を一周した日本人となる。

しかし鎖国政策中であった江戸幕府は彼らの上陸を拒み、多十郎は絶望して自殺未遂をおかす。翌年3月、ようやく日本に引き渡されるが、長崎に留め置かれて詮議を受け、さらに江戸の仙台藩下屋敷で取り調べを受け、故郷に戻ることができたのは石巻を出港してから13年後、1806年の冬の終わりであった。

津太夫と左平はその後故郷の寒風沢島で平穏に暮らしたが、再会した家族やロシアに残してきた仲間たちに迫害が及ぶのを恐れ、生涯口を閉ざしたという。

「海よりも風よりも～本郷笙吾編～」抜粋

「きっと船員たちは、心を一つにしようと、楽しい話をしたり、故郷の家族の話をしたりして、皆で、この漂流する時間を耐えていたんだろうなと思う。

責め合はんではなく、皆がひとつになることで、状況をよくしようとしていたんだと、ぼくは思う。」

「ロシアに残る者は、帰りたくても帰れない故郷に対する想いを押し殺し、新たな運命を受け入れた。

日本に戻る者は、家族や故郷にもう一度会いたいと願っていた。

決断は異なるけど、両者とも、『命を失った仲間の分まで、しっかり生きていきたい』と願う気持ちは一緒だったんじゃないかなと、ぼくは思う。」

「生きる」ことに向き合った16人が、とてもかっこいいなと思う。

さまざまな人生を生きぬいた、船員たちが、ぼくは、とてもかっこいいと思う。」

(塩釜市立浦戸第二小学校6年生)

淡海節　～海よりも風よりも　木島裕編～

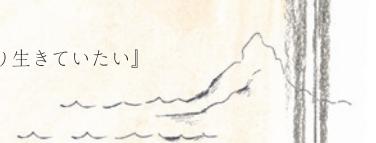
船の帆を上げ　港を出れば
揺られ揺られて　いく日や
荒れる雨風　ヨイショコシヨ
道なき道を　どこへやら

波に押されて　いざこへ行くや
命帆に懸け　涙越え
見て來たるは　ヨイショコシヨ
遠い異国の　山の尾根

せめてカモメの　片羽根あれば
飛んでゆきたい　妻のそば
遠く離れる　故郷あれば
思い出さぬは　主の嘘
涙堪えて　ヨイショコシヨ
生きる運命も　かなしかな
心墨絵の　浜千鳥

(民謡歌手)

語り継ぎのための リーディング





つながる湾 フォーラム

～海・種・記憶～

2013年6月からの半年間、地元チームとTANeFUNeチームは交流しあい、刺激しあいながら湾で活動し、湾の文化を見つめ続けてきました。「つながる湾フォーラム」は、私たちが見つけた湾の記憶をより多くの人々と共有するために企画・開催した学びと対話の場です。

1日目は、TANeFUNeの活動内容の紹介とともに、チームwan勉強会のテーマの中からより重要と思われるテーマを選んで講師の方に講演していただき、「海・種・記憶」をテーマに会場のみなさんと一緒にディスカッションをしました。2日目は寒風沢島に場所を移し、「語り継ぎのためのリーディング」から生まれたオリジナリティ溢れる語りを聴いていただき、日本一周物語の舞台となった場所を歩いて島と海を体感しました。

さまざまな場面で活動に参加してくださったみなさんをはじめ、これまで出会わなかったような老若男女さまざまな方にご参加いただき、この活動の意義をもう一度確かめることができました。

DAY 1. 日時 2013年12月7日 13:00~16:45

場所 ふれあいエスプ塩竈 エスプホール

トーク&パネルディスカッション

- ・基調講演 「日本列島孤の水の文化（講師：山田創平）」
- ・活動紹介 「『種は船』プロジェクト紹介」「リエゾンキッチン」
- ・パネルディスカッション「海・種・記憶」
- ・展示「TANeFUNe in 浦戸諸島」
- ・「そらあみ」体験ワークショップ

DAY 2. 日時 2013年12月8日 10:40~14:00

場所 民宿外川屋（浦戸諸島寒風沢島）

浦戸諸島を伝えるリーディング

- ・語り継ぎのためのリーディング「海よりも風よりも」発表
- ・寒風沢島散策

1.TANeFUNeが集めた宝物の展示。2.リエゾンキッチン高橋信壯氏による活動紹介。3.「そらあみ」体験ワークショップ。4.島に囲まれた穏やかな湾の風景。5.湾で暮らす幅広い年代が参加。6.歴史と文化を辿る寒風沢散策。7.湾で暮らす人達が参加したパネルディスカッション。8.民宿で開催されたリーディング発表。9.寒風沢島の小道にたたずむ六地蔵について解説を聞く。



「わからない」を許容していく時、「地域らしさ」が見えてくる

「種」がもたらしたもの



「つながる湾プロジェクト」は、松島湾に植えられた「TANeFUNE」という小さな種から芽を吹きました。見知らぬ土地からやつてきた風変わりな種と、戸惑いながらそれを育てた地元チーム。その葛藤から生まれ、育まれようとしているものは何なのか。

「種」を各地に蒔き続ける日比野克彦さんと、その種を受け入れ、松島湾岸にひとつながりの意識を育てたいと願う津川登昭さんに、語っていただきました。

が世界中で同時進行してるわけだけど、その中で少しずつキーワードが似ている、ポイントが近いプロジェクトがあつて、つながる湾プロジェクトのコンセプトに、「種は船」の「記憶をつなげていく」「港をつなげていく」「海からの視点で」つていきのキーワードがひつかかってきた。じゃあどちらが主導権を握るのかとか、どちらが主役でっていうことではなく、つながることによつてそれがまた違うものに変容していくことで、今後の展開になつていくと思うんですよ。なので、「種は船」の成り立ちもそんなんだけど、先のことはわからなくて。でもわからぬといふことを許容して進んでいくことの決意というか、そこ面白さがあるよね。

「種は船」のプロジェクトでいけば、2012年に東に向けて

舞鶴を出航して、16年後に西の海からTANeFUNEが帰つてくる姿を舞鶴チームやタネフネチームはイメージしているけど、途中は見えない。逆にそれが、計画的に来年はどこに行つて次はどこに行つて、つてばちつと計画を立てるときつと「負け負う」ことになつちやうと思うのね。舞鶴行く前に十和田よろしく、瀬戸内よろしく、鹿児島よろしく、みたみなことなつちやうと、任務を果たすみたいになつちやつて、一十人が一のままで終わつちやうから。予期できない変化が起こつて広がっていくのが魅力であり、そこを引き受けるつていうのが大事かなと思う。



津川 今だから言えることなんんですけど、始まった時はよくわからなかつたというのが正直なところで。やりながら気持ちが変化していったわけですが、その変化の仕方というのにもしかしたら「この地域らしさ」が潜んでいるような気がします。自分が実験台になつて格闘することと、自分もこの地域の人間だということをあらためて認識できた気がします。メンバーそれぞれで捉え方が違うと思いますが、間違いくと言えるのは、スタートした時点では誤解してましたね。「何をこなせば



日比野 津川さん、プロジェクトの最初に話をした時点では「種は船」という

プロジェクトを「負け負う」的な感覚でいたと言つてい

たよね。そこから徐々に変わつて「自分たちでやつていくんだ」と思つたつてい

う。いろんなプロジェクト

モノが来ちゃったからね。

津川 最終的にはプログラムがまとまって分かりやすくなっていますけど、ここにいたるまですごく大変でしたね。ただ

話し合いは、定期的にみんなで集まってほんとに夜中まで話しましたね。無駄になつたアイディアもたくさんあつて。「タネフネをどうする?」「つなぐってなんだろう?」とか、自分で考え抜いて、なんとなく光が見え始めて、それをモノにしてきた。途中から自分らの問題になつたんですよ。勉強会にしても、最初はタネフネがいるからやるって言つてたんですけど、途中からタネフネはどうでもいいやつてなつて。タネフネがなければ勉強会も無かつたと思うんですけど、タネフネ関係なくやる、っていう感じになつた時に自信持つて「ああこれだ」と言えましたよね。彩ちゃん(※)も最初すごく戸惑つてて。

最初は本当にわけわからなかつたし、

「逃げようかな」みたいな。

いいんだ?」みたいな。なので、事例というか、今までのタネフネの実例を求めてました。でもそうじやないよなと。最初は本当にわけわからなかつたし、「逃げようかな」みたいな(笑)

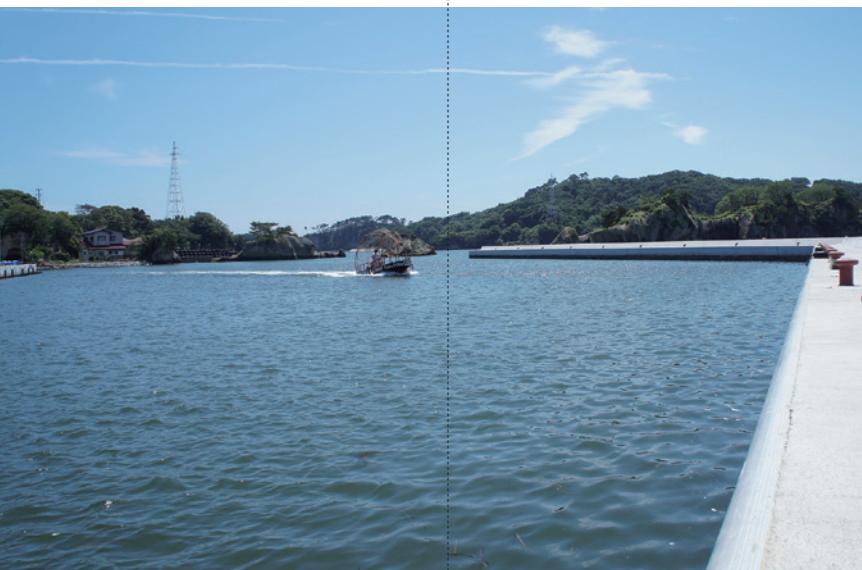
日比野 いきなり船がやってきちゃつたからね。どかーんとんでもない大きさでね。ガレージに置いとけ!みたいな(笑)

被災した島に自分が理解しきれていない「アート」を持ち込むことにもものすごく責任を感じてしまつてたみたいです。島というのがどういう場所かも理解できていなかつたです。でも恐る恐るでもやつてみたことで、この湾にとつての島の存在の大きさや、文化的な意味を感じることができ、自分なりの活動に展開できている。成長させてもらつたなと。なので今後やりたいことの一つは、同じようにタネフネが来て、ビビつて、どうする?逃げる?やる?とかつて感じで悩み抜いた地域との交流ですね。自分なりの悩み方をすることで、自分の中に潜在的にある、遺伝子の中に眠つてゐるような歴史を掘り起こせると思うんで、それを経験した人と交流したいですね。

「湾」と「島」と「人」

日比野

TANE FU N Eが最初来た時には、「湾」というよりは浦戸諸島をステージにするということを言つていたけれど、実際は塩釜という大きな港を拠点にして4つの島を周ることになつた。塩釜湾のこの立地条件というか、湾と島の関係つていうのは相当特異な稀な状況だと思うんですね。湾は島が無くとも湾なんだけど、島々が無かつたら「湾」ということを意識できたかというと違うと思うし、塩釜を母港として浦戸諸島と行き来しながら島々を巡るっていうのが特徴的だつた。



日比野 島の人たちはこのプロジェクトをどう思つてているの

津川 他には無いこの湾の特徴だと思います。島が多いのもそうだし、土砂を運ぶ川が無かつたので縄文時代から同じ湾の形を保つてゐる。自然条件があつて地形があつて、人間がそこでどう暮らしたかによつてたまたまこの湾ができる。僕は

どちらも大事だと思つてるんですよ、こっち側と島側と。島がなくとも湾なんんですけど、この地域のこの湾には成りえなかつたし、やつぱりこれは丸ごとセットで、外すことができない必要な素材なんですよ。だからタネフネが来た時に「島に行きた」というのを聞いて、僕は最初に街の方を紹介した。両方知つた上でここを行き来しないと、たぶん本当の島を知ることもなかつたのかなという気がします。

結果的に新しい価値観、
新しい社会の仕組みを
作るぐらいのものになる
可能性はあると思う。

「ランディングしたいんです」って言つたら、「他の地域のこと
はやりにくいんだよ」と言われました。だったら自分らがや
ればいいやと思って同世代のつながりを作つちゃえと。そし
たら今行政の人とも連携できてるし。行政にやつてやつてつ
て言うばっかりじゃダメなんだと気付きました。民間と行政は
ポジションが違うんで、役割を考えながら共通する部分を育て
ていくことが必要かなって。

「つながる湾」が生み出せるもの

島の人たちつてお年寄りが多くて、違う表現をして
伝えないと伝わらないと思うんで、そこが課題かなという気は
しますね。あと、いざれ島に住むであろう人たち、住みたいたと
言つてはいる若い人たちがいるんですけど、彼らが「つながる湾」
を意識してくれるといい。僕は、塩釜の人や、七ヶ浜や多賀城
といった同じ松島湾の沿岸に住む人たちと定期的に飲み会をし
ているんですけど、話をすると、湾構想って誰も否定しないん
ですね。だからやっぱり必要なかなっていう根拠の無い自信
はあるんですよ。最初に構想した時に、行政の人に「湾でブ

かも気になるところだよね。

て、収入もあつて、ちゃんと生活がしていけるような。「水際」
での陸上と水上の文化の新しい混ざり方も創れるんじゃないか
と思う。「塩釜じゃないと生まれてこなかつたね、あの発想は」
みたいなものを生み出せると思うんだよね。津川さんが松島湾、
塩釜湾のために、浦戸諸島のためにと考えることが、結果的に
新しい価値観、新しい社会の仕組みを作るぐらいのものになる
可能性はあると思う。それぐらいのことを勉強会だと、実際
のプロジェクトとかの中でやつていけるといいよね。



津川 地域のこと
を深く掘り下げて自分
らで楽しんで、他の地
域の人々に自慢していき
たい。それを継続して
いくためには、熱い想
いと経済の循環の両方
が必要なんだと思いま
す。そして、何よりも
湾でつながることのが
新しい力を生むんだと
信じています。(2013
年12月7日／ふれあいエスプ
塩釜)

日比野克彦(アーティスト)

東京芸術大学教授。活動範囲は作品制作に留まらず、パフォーマンスなど身体を媒体とした表現にも及び、「生きることは自分を表現すること」として、手段に束縛されず自己の可能性を追求している。『種は船』では監修・コンセプトを担い、多様な人々や活動、地域が交流するプロジェクトを開拓している。

津川登昭

(一般社団法人チガノウラカゼコミュニティ理事長)

塩釜市生まれ、多賀城市在住。仙台市の広告会社に所属し「純米酒BAR」「せんコン」などをプロデュース。震災後、湾の恵みで営むこの地域は全て兄弟であると感じ、湾コミュニティによる新しい力を生むために一般社団法人チガノウラカゼコミュニティを発足。「製塩文化を伝える」「湾の産品を売る」「湾コミュニティの拠点としての湾の駅構想」を提唱している。

*1 彩ちゃん：ビルダーブルーガス代表の高田彩。地元チームとして、津川氏らとともに「つながる湾プロジェクト」を運営している。P27にプロフィール。

*2 日和山と縛り地蔵：港近くの小高い山を「日和山」と名付けた例は全国に存在し、船乗りが山頂に登り天候を見定めたと言われる。「縛り地蔵」は、男たちを島に留めるために女性が地蔵を縛り、天を怒らせようとする「逆風信仰」の対象となつた地蔵。

つながる湾プロジェクト 2013 全記録

- 5月 26日
場所／塩釜市浦戸諸島4島
Welcome!! TANeFUNE @ 塩竈浦戸のりフェスティバル
- 5月 26日
場所：ビルドスペース（塩釜市港町）
つながる湾プロジェクトキックオフミーティング
- 6月 10日
場所：五十嵐邸（塩釜市玉川）
第1回 チーム wan の会
- 6月 16日
場所：塩釜市浦戸諸島寒風沢島
寒風沢島田植イベントにTANeFUNEが参加
- 6月 20日
場所：五十嵐邸（塩釜市玉川）
第2回 チーム wan の会
- 6月 23日
場所：くろしおマーラー（塩釜市北派）
TANeFUNE デッキリペアワークショップ
- 6月 27日
場所：ビルドスペース（塩釜市港町）
第1回 チーム wan 勉強会
- 6月 29日・30日
場所：マリンゲート塩釜
TANeFUNE 乗船体験
@マリーベルト塩竈リニューアル一周年祭

- 7月 4日
場所：五十嵐邸（塩釜市玉川）
第3回チーム wan の会
- 7月 4日～6日
場所：釜ヶ淵、御釜神社（塩釜市）
TANeFUNE が御釜神社藻塩祓神事を取材
- 7月 11日
場所：五十嵐邸（塩釜市玉川）
第2回 チーム wan 勉強会
- 7月 21日
場所：塩釜市浦戸諸島
TANeFUNE 乗船体験
@アマモ再生企画 in 浦戸諸島
- 7月 25日
場所：ビルドスペース（塩釜市港町）
第3回 チーム wan 勉強会
- 8月 1日～31日
場所：塩釜市浦戸諸島4島
TANeFUNE カフェ in 浦戸諸島
- 8月 8日
場所：ビルドスペース（塩釜市港町）
第4回 チーム wan 勉強会
- 8月 10日～31日
場所：塩釜市浦戸諸島4島
そらあみin浦戸諸島

(プロジェクト継続中)

参加者一覧

あ 相沢哲彦（塩釜）	か 小野 実（南三陸）	鈴木虎男（塩釜）	日比野克彦（東京）
相原綾子（仙台）	加藤信司（塩釜）	鈴木信敏・節子・佐佳・鈴乃（塩釜）	東拓身（仙台）
赤井靖武・明子・樹里（仙台）	川畠栄美（朴島）	木村忠人（塩釜）	吹田歩香（仙台）
赤間俊介（仙台）	川又克久（塩釜）	鈴木秀基（塩釜）	藤田未緒（多賀城）
アサノハラワミ（塩釜）	菅野圭一（塩釜）	須藤健志（塩釜）	本田武頼（舞鶴）
阿部徳和（塩釜）	龟井川宏人・普斗（仙台）		
阿部富士男・多賀城）	北本麻理（京都）	高田謙歩（塩釜）	松村翔子（仙台）
五十嵐綾子（千葉）	木村衣里（小浜）	高橋恭（千葉）	耕泰殊（白石）
石川洋平（七ヶ浜）	久保田晴朗（七ヶ浜）	高橋育也（東京）	三浦麻衣子（仙台）
石谷田華那（七ヶ浜）		高橋栄悦（石浜）	三塚寅貴・あや・悠蓮・俐乃（仙台）
板橋由紀（塩釜）	し 神前沙織（京都市）	高橋貞昌・裕子（石浜）	水戸雅彦（大河原）
伊藤聰（南三陸）	西城 潤（南三陸）	高橋英良（塩釜）	宮城千里（塩釜）
岩澤克輔（仙台）	斎藤洋季（南三陸）	高橋 寛（仙台）	森司（東京）
岩田大樹（舞鶴）	柳未來矢（仙台）	田中翫一（仙台）	森勝博（寒風沢）
内海 亜哉（桂島）	佐々木康介（仙台）	段家亞紀子（仙台）	森真理子（舞鶴）
内海勝（桂島）	佐々木孝雄（南三陸）	千田優太（仙台）	
内海ただ子（朴島）	佐藤利明香（七ヶ浜）	津川登昭・青玄（多賀城）	谷田敬史・凜里子（白石）
内海友輝（桂島）	佐藤厚（仙台）	土見大介（塩釜）	山田みえ（塩釜）
内海洋佑（桂島）	佐藤由美（仙台）	外川暁信（東京）	吉田千惠（仙台）
遠藤勝（野々島）	佐藤後光（南三陸）	處美野（東京）	吉田敏一（塩釜）
及川吉則（南三陸）	佐藤千李子（塩釜）	富田将司（愛知）	吉田ゆみ更（塩釜）
大田和美（仙台）	佐東範一（京都）	富谷圭輔（仙台）	吉田彩乃（塩釜）
大田真（塩釜）	佐藤勝（新潟）	豊平豪・實（舞鶴）	
大友恭子・琴紗（塩釜）	佐藤浩子（新潟）	渡辺幸子（塩釜）	渡辺幸子（塩釜）
大友真紀（仙台）	佐藤季香（東京）	な 中沢千子・千世（塩釜）	渡辺清子（南三陸）
大沼聖枝（塩釜）	塩谷野卓（東京）	中島佑太（前橋）	渡辺英保・ゆき子（石浜）
大沼剛宏（塩釜）	島津功（寒風沢）	野内隆裕（新潟）	渡辺弥恵（利府）
大林政夫（仙台）	白石法子（神奈川）		
尾形孝雄（朴島）	末永恵美（塩釜）	は 横元良枝（大崎）	
小野具大（南三陸）	菅井章子（舞鶴）	畠中みゆき（桂島）	※他多数の方々

つながる湾プロジェクト

主催：ビルフルーガス+一般社団法人チガノウラカゼコミニティ、
一般社団法人 torindo、えすこ芸術のまち創造実行委員会、
東京都、東京文化発信プロジェクト室（公益財團法人東京都歴史文化財团）

2013年5月～2014年3月

本事業は Art Support Tohoku-Tokyo（東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業）です。

つながる湾プロジェクト ドキュメントブック

海辺の記憶をたどる旅

2014年3月

あとがき

2013年5月、この湾へやってきたTANeFUNEは、まるで図らずも海流に乗ってこの地に辿り着いた漂流船のようだった。初めは、非日常の連続である被災地に正体不明の船が漂着したことに戸惑った。
「この船は何をしに来たのか。」

疑問はやがて新たな課題へと変換され、TANeFUNEは「この地域の物語や記憶を積み込むうつわ」として、私たちこの地域を否応なく向き合われた。

チームwan 勉強会で「三陸汽船」を題材にした際、明治40年代、三陸沿岸を民間事業による汽船が運航し、荷物や旅客を運んでいたことを知った。実は高田家もその頃、岩手から移住している。地域の文脈から、自分の家系がいつ、いかにしてこの地域に辿りついたのかを知り、この土地の歩みを自分事として捉えるきっかけになった。活動に取り組む中でそうした気づきを何度も経験するうち、不安はいつしか好奇心へと変わっていました。

今では、2013年5月に蒔かれた種は様々な芽を出し、この地域に根付いている。そしてTANeFUNEは、この地域の物語を山ほど積み込み、引き続き各地域の文化を載せて、次の漂流へと旅立つだろう。そして、漂着した地域と地域のヒト・モノ・コトを行き来させてくれるだろう。

これからも統いていく海域文化圏のつながり。この先、国内外の人々や文化と出会うのが楽しみでたまらない。

最後に、日比野克彦さん、舞鶴「TANeFUNE」チームの皆さん、五十嵐靖晃さん、そしてこのプロジェクトに参加いただきました全ての皆様に心より感謝申し上げます。

高田彩

共催：塩釜市、塩釜市教育委員会
助成：公益財團法人日本財團
協力：ヒビノスペシャル、チーム wan

Printed in Japan.

Copyright©2014 TSUNAGARU WAN PROJECT. All rights reserved.
本誌掲載の記事、写真、イラストレーションの無断転用を禁じます。

Supported by 日本 THE NIPPON

